

岩手の農村に生きる —農家の主婦のライフストーリー—

佐藤 利明*

Life-Story of Ladies in Agricultural Area in Iwate Prefecture

Toshiaki SATO*

**Department of Human Culture, Faculty of Human Studies, Ishinomaki Senshu
University, Ishinomaki Japan*

1. はじめに—ライフストーリー分析の方法—

中野卓は1977年に上梓した『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代』の18年後、同書増補版で「面接調査を通して人間個人を理解するライフ・ヒストリー研究」が自分の「方法論」であると宣言した（中野；1995、p295）。その意味するところは、「個人と全体（全体社会）とが直接相互媒介するのが人間の存在構造で」あって、個人と社会が「相互規定の関係」にあることから、「社会によって規定されながら逆に社会を規定している存在としての個人を捉える」方法ということであった（中野；2003、p26-27）。

生活史（ライフ・ヒストリー）研究は、桜井（2013）によれば、オーラリティ（口述）の他に「自伝、日記、手紙などの個人的記録を利用する質的研究法のひとつ」で、「個人のオーラリティを主なデータとするライフストーリーとは厳密には区別される」（傍点筆者）もので、1977年の中野の業績は「ライフストーリー研究へ向かう新しい可能性を切り拓いた」と評価する（同書、p15）¹⁾。

本稿は、生活史分析の理論に依拠して、農家の主婦がこれまでの人生をどのような想いを抱きつつ歩んできたのか、対象者へのインタビューによって得られた（＝語られた）3人の主婦の生活過程を、ライフストーリーの方法を用いつつ再構成を試みるものである。

2. 岩手の農村女性

2.1 娘として、嫁として、母として

1961（昭和36）年、当時18歳だった藤原久美

子さんは、

「人手の足りない私の家に出て来た結婚話は他人ごとではありませんでした。私に婿を迎えることで一人でも働き手をほしかったからでしょう。私の嫌がることなど目もくれず、親たち親類同士で勝手にことをはこんでいたのです。・・・（略）・・・私の知らぬ間にそっととりきめようとするのです」

と述べている（大牟羅；1962、p312-313）。3年後の東京オリンピック開催にむけて、日本が経済成長に沸き始めた頃である。終戦から15年を経て国家の基礎も固まり、民主的で自由な社会が定着しつつあった。しかし、北上山地の農家の姉妹の長女として生まれた藤原さんは、高校進学あるいは看護婦になる夢もあきらめて、家を継がねばならなかった。青年会の活動に参加することも親から反対され、家の後継ぎとして婿を迎えねばならなかった。

時代は移って、北上市の農家の主婦である三田喜代さんに「秋の一日」と題する1992（平成4）年頃の詩がある。

「天気の良い秋の一日
嫁の順子と孫達と夫も一緒に
ドライブに出かける

若い頃 夢見た
美しい農村 豊かな農村とは

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

この一日なのかもしれない」

当時、三田さんは59歳であるから、1933年（昭和8）年生まれである。引用は詩の最後の部分で、この前には「秋の一日のおくれは／十日のおくれと言うが」とあるので、稲刈りはまだ終わっていないにもかかわらず、家族でドライブに出かけることにしたのである。さらにその前の方では30年前の農作業の情景や、嫁としての辛い経験がつづられている（小原；1992、p14-16）。

世代的には藤原さんは三田さんよりおよそ10歳若い。しかし、2人とも家のしがらみを経験していた。

戦前期、「家制度」のもとでの女性の多くは、娘として生まれれば嫁になり、母になり、そして主婦として家を切り盛りし、姑となった。嫁には家の後継ぎを産むことが求められ、農家の嫁は「角の無い牛」とも呼ばれてきた。あるいは、家の存続のため婿を取らねばならなかった。

戦後になってもこうした嫁の立場、女性への役割期待は長く解消されなかった（矢内、1922、p232-234）のだが、三田さんは「時代は変わった」と詠んだ。

2.2 3人の主婦のプロフィール

三田さんとほぼ世代を同じくする3人のお母さん方がいる。

3人とも農家へ嫁ぎ、母となり主婦となって家に尽くし、子を育てあげてきた。しかし、3人はほぼ同じ世代ではあるものの、生まれも育ちも、そして嫁いだ地域もそれぞれ異なっている。

岩手の地で3人の母たちはどのような人生を歩んできたのだろうか。

3人の簡単なプロフィールをまとめたものが表1である。以下では、3人の旧姓は省略して、す

べて現在の姓名のイニシャルで示すことにする⁽²⁾。

最初に登場するS.Rさん（昭和8〔1933〕年生まれ）は、岩手県の北部北上山地の山中で夫と姑が亡くなった後、ひとり家屋敷と畑3ヘクタールを守ってきたお母さんである。しかし、現在は寄る年波もあって、5アールほどしか利用していない。S.Rさんは6人の子を育ててきた。

Y集落に属するS.Rさんの住む所は、山肌にへばりつくようなという形容通りの、沢筋に発達した急勾配の地域で、その一番奥の家で犬と暮らしている。ここにはS.Rさんを含めて家は3軒しかないが、中の家は転出して空き家となり、下の家は80歳を過ぎた夫婦が暮らしている。

二番目に登場するのは、岩手県北部の山間地で3人の子どもを育て上げ、現在は夫と犬と暮らすM.Sさん（昭和10年〔1935〕生まれ）である。

水田を60アールほど所有するも、現在は昭和5年生まれのご主人と10アールしか作付けしていない。ほかに3ヘクタールほどの牧草地を所有するが、地域の酪農農家へまかせている。

M.Sさんの住むT集落は、戦後、樺太からの引揚げ者家族が定住して切り拓いたむらで、M.Sさんは、樺太の豊原の国民学校に3年ほど通った。

3人目は、県中央部の平場農村に位置するN集落で水田を経営するT.Sさん（昭和13年〔1938〕生まれ）である。自分で手掛けるのは家の周囲のわずかな田んぼのみで、所有水田のうち5ヘクタールを地域の農業法人に委託している。

夫を早くに亡くし、2人の娘さんのうち下の娘夫婦、孫2人の5人暮らしである。T.Sさんの家は地域でも有数の旧家で、嫡男は代々同じ名を継承してきた。こうした家筋であることも、T.Sさんが農協婦人部の代表として地域の女性リーダー

表1 3人の母たちのプロフィール

氏名	生 年（年齢）	生家の仕事	きょうだいの構成／位置	学歴	結婚年	子ども
S.Rさん	昭和8年（77）	炭焼き	女3人・男2人／長女	国民学校	昭和27年	男・女5
M.Sさん	昭和10年（76）	編み物店	女1人・男2人／長女	新制中学	昭和29年	男・女
T.Sさん	昭和13年（73）	農家	男3人・女4人／四女	新制高校	昭和33年	女2

資料：聞き取りによる。

注（1）生年月日の後の（ ）は、2011（H23）年9月現在の満年齢。

（2）生家の仕事は、小学校入学当時のもの。

の役割を担ってきた理由のひとつと考えられる。

以上のように、3 人のお母さん方は昭和 10 年前後のほぼ同時代生まれであるが、山間地、開拓地、平場農村という異なった地域で、妻として母として生き抜いてきた。

2.3 3 人の主婦の住む地域

S.R さん、M.S さん、T.S さんそれぞれが住んでいる所はどのような地域なのか、農業センサスのデータを基に素描しておきたい。

S.R さんの久慈市 Y 集落（地区）は標高 300 メートルを越える山間の傾斜地、M.S さんの岩手町 T 集落（地区）も標高 400 メートルの山間地ではあるもののやや平坦な地勢である。それに対して T.S さんの花巻市 N 集落（地区）は標高が 120 メートルと比較的低地の平坦地で、農家も散らばって集落を形成する（表 2）。

次に、表 3 で地域の概要をみると、S.R さんの地域は山間に 14 戸の家々が散在しており、うち農家が 5 戸しかない。これは、高齢化によって農業を中止して非農家となった世帯が多いという実態を示すものである。農家のみの人口が 26 人、うち女性は 13 人、農家人口でみた高齢化率が 2000 年現在で 34.6% という人口動態であるが、Y 集落全体では高齢化率はもっと高く、しかも高齢者世帯がかなりを占め、かつ S.R さんのように一人暮らしの高齢者の多い地域である。

耕地面積がわずか 6 ヘクタールでそのほとんど

が畑地であるのは、山間地域であるという土地条件もさることながら、かなりの耕地が耕作放棄されてしまった結果である。農家 5 戸のうち自家消費程度しか作物を作っていない自給的農家が 3 戸であることが、この地域の現状を物語る。いわゆる「限界集落」（大野；2008）と言い得る状況である⁽³⁾。

M.S さんの T 集落は総戸数 36、うち農家が 26 戸で、90 ヘクタール近くの耕地の 3 割ほどが水田である。現在では酪農・畜産にかなり取り組まれる複合経営の農村であった。

農家人口が 76 人、うち女性が約 50% であるが、農家人口でみた高齢化率が 40.8%、自給的農家の割合が 30% となるから、S.R さんの Y 集落同様、農家の高齢化の中で、農家の脱農業化がかなり進んできた地域と判断される。しかし、農家 1 戸あたり平均 3 人家族なので、平均 5 人の N 集落に比べれば、若い家族世帯員の流出した高齢世帯化が進んできた地域と特質づけられる。

平場の T.S さんの N 集落は、戸数は M.S さんの T 集落とほぼ同じであるものの農家率は約 60%、農家人口も 100 人を超え、しかも 1 戸当たり平均 5.4 人、高齢化率が 26.9 となっているから、比較的若い世帯員の同居する花巻市近郊の水稻中心の兼業農村という性格が見て取れる。

以上のように、山中に孤立的な地勢の中で高齢者の多い S.R さんの Y 集落、山間地ではあるものの農家が点在して米作りと畑作を行っている M.S さんの T 集落、都市近郊の米の単作地帯である T.S さんの N 集落という特徴の違いが浮かび上がって来る。

それぞれの地域で、3 人のお母さん方はどのような人生を歩んできたのだろうか⁽⁴⁾。

3. 北上山地に生きる－S.R さん－

3.1 子どものころ

S.R さんは、現在の家からそう隔たってはいない旧山形村に 5 人きょうだいの長女として生まれた。母は再婚だが、S.R さんの弟と妹は再婚相手の子として生まれた。

母の再婚相手、つまり S.R さんの父親は炭焼きを生業としていた。昭和 16 年、T 小学校（＝

表 2 3 人の母たちの住む地域

氏名	集落	標高(m)	地勢	耕地の状況	集落形態
S.R さん	Y 集落	300	山間	緩傾斜地	散在
M.S さん	T 集落	410	山間	平坦地	散在
T.S さん	N 集落	120	平野	平坦地	散居

資料：2000 年農業センサスより。

表 3 地域の概要

集落名	総戸数 (戸)	農家数(戸)		農家人口 (人)	高齢化率 (%)	耕地(ha)	
			自給的 農家			田	畑
Y 集落	14	5	3	26(13)	24.6	1	5
T 集落	36	26	8	76(39)	40.8	24	62
N 集落	32	19	1	104(54)	26.9	71	1

資料：前表に同じ。

注 (1) 農家人口の () は女性で、内数。

(2) 高齢化率は農家人口における割合を示す。

国民学校)へ入学する。しかし、入学1年後、Y小学校へ転校し、さらに4年後にK分校に転校するので、両親は定住せずに北部北上山地の山中で木炭を焼いて渡り歩いていたと推察される⁽⁵⁾。

S.Rさんは幼いきょうだいの面倒を見なければならず、学校へは3年ほどしか通っていない。当時のこの地域は尾根を伝い、川を越える山中の道しかなかった⁽⁶⁾。実際、学校までは妹を背負って1時間ほどかかっていたという。しかし、学校へ行っても男の子にいじめられ、下の子の世話もしなければならず、「勉強になんなかった」と振り返った。

学校に行かなくなってからはきょうだいの世話は当然として、伐採した木を炭焼き窯まで運んだり、焼きあがった木炭を背負って運び出すなど両親の手伝いをしていた。

16歳になる前年に父親が亡くなることでS家へ奉公に出ることとなった。S.Rさんは理由を語らないものの「母親と一緒にいるのが嫌で嫌で、(母親から)離れたかった」と言う。奉公先では農作業や馬・牛の飼養の手伝い、山で草を刈った後に乾燥させる「シマ」立ては他の人たちは5つ作るが、S.Rさんは3つ作るのがやっとだった。

3.2 嫁となり母となり、そして主婦となる

1952(昭和27)年、19歳になったS.Rさんは本家の世話で現在のS家へ嫁ぐ。夫は1931(昭和6)年生まれであるから、2歳上であった。夫の両親、夫の弟が同居する農家であった。

結婚した年に長男が生まれ、その3年後に長女と、1967(昭和42)生まれの五女まで計6人の子どもを産んだ。子どもは全員自宅で出産した。

S.Rさんは嫁として家事はもちろんのこと、農作業、牛と馬の飼料の世話をする日々であった。姑は「朝、3時には起きて起しにやってくる」が、「子どもをエンツコ(=小さい子どもを入れておく藁で編んだ入れ物)に入れて世話するうちに台所へ行くのも遅くなっ」てしまうこと度々だった。家族の洗濯も全部した。子どもの世話で畑へ出るのも遅くなり、姑から「今朝も9時になったぞ」とよく小言を言われたという。

子どもたちは全員F小学校、Y中学校へ通ったが、徒歩通学であるため朝7時には家を出なけ

ればならず、その弁当作りもひと世話であった。1960年代半ばから80年代初めまでの15~16年間、6人の子どもたちは相次いで学校に上がり、うち1960年代末からのほぼ10年間は、毎年3人から4人の子どもが小学生・中学生として学校に通っていた。

長女が中学を卒業した翌年、次女が中学に上がった1973(昭和48)年に、40歳になったS.Rさんは、65歳になっていた姑から財布を渡される。つまり、S.Rさんは嫁いでおよそ20年を経て嫁の立場から主婦の立場になったのである。翌年には五女が小学校へ入学するが、母としてはあと10年ほど子育てに邁進しなければならない。

主婦とはなったものの、舅が80を越して亡くなるのは17年後であるし、姑はさらに31年後に96歳で逝去するから、実質、嫁としての位置はまだまだ継続されることになる。

子どもたちは中学校を終えるとみな就職して家を離れていった。長男は大工になり、長女は滋賀県、次女は名古屋へ就職する。その後、長女と次女は結婚を機に岩手に戻ってきた。三女と四女は県内に就職し、四女は准看護師となって盛岡で定時制高校へ通った。

子どもたちは全員結婚し、現在、孫が15人、ひ孫が11人いる。

3.3 昔の食事そして農業

稲作のできない地域であったため、普段の食事はムギとヒエで、おかずは魚か漬物程度であった。米のご飯はお盆か正月にしか食べなかったという。魚も塩漬けのもので、「ものすごくしょっぱかった(=塩っぱかった)」。山中であるから新鮮な魚は手に入らなく、「沿岸から魚売りが歩いてきた」ものの、「弱ったのが多いし塩気が強いものばかりだった」。

子どもたちの弁当の「おかずは梅干や漬物、玉子を炒めたものを味噌で味付けしたもの」だったというから、ヒアリングでは確認しなかったが、当然ながら自家の採卵用に鶏を飼っていたことは想像に難くない。

豆腐は今でも作るが、以前も自家栽培の大豆がよく作ったという。手打ちそばも作ったというから、ヒエ、アワ、大豆などと共にソバも栽培して

いた。その他の野菜も、大根や白菜は漬物用に栽培すると共に、ジャガイモやサトイモなどの芋類、大豆その他の豆類、夏野菜など、自家消費用にかなり自給的に作付けし、夏場には養蚕をし、一時期、デントコーン（＝飼料用トモロコシ）も作っていた。冬になると土方仕事に出て稼いだという。

3.4 辛かったこと、楽しみだったこと

S.Rさんは6人の子を育てたことを辛かったとは言わないものの、「毎日が仕事で大変だった」。そして「貧乏だったからお金には苦労した」と言い、「人が亡くなった時、香典を持っていくのに苦労した」と語る。夫の叔父が亡くなった際、「香典のお金が無くて困った」が、折り良く養蚕の収入が3万円入って「間に合った」。

困ったこととして、夫、舅、姑の3人が毎日1升もの焼酎を飲むため、ともかく焼酎代がかかったと述懐する。姑が厳しかった、とも語る。姑は料理が苦手だったが、舅は「几帳面な人で台所も手伝ってくれ」、姑は「大雑把だし外で働きたがった」から「（舅と姑が）逆だったら良かったのに」と思うこと度々であった。

夫は「酔うと怖い人で、頭を薪か棒で叩かれ三ヶ月入院した」こともあった。夫が暴れて部屋の電球も粉々になっていた。

楽しみとして、家族や子どもと年に1、2回、久慈市への祭り見物があった。200円貰って行くがバス代110円と80円のラーメンを食べるとそれでなくなり、祭りや屋台の様子は見るだけだったが、楽しい思い出であるという。時期的にはS家に嫁入りしてほどなくのことかもしれないが、自由に使える金など嫁にはなかった時代である。

S.Rさんは子どもたちに対して「稼ぐのが精一杯で、あまり面倒を見てやれなかった」と振り返るが、運動会は楽しみだったようで、「運動会の時はお稲荷さんをよく作って」観に行ったという。「小学校は100人くらいいて、運動会は盛り上がった。学校行事が地域にとっても楽しみであった頃である。長男・長女の頃（1960年代）と四女・五女の頃（1970年代）とでは状況が異なるものの、地域にまだ子どもたちがおり、学校が統合されて地域から学校が消えていくようにな

る直前の時代である。

3.5 夫の逝去、そして現在

舅は1990（平成2）年に亡くなる。80を越えていた。それから13年後の2003（平成15）年、夫が不慮の事故で亡くなった。享年72だった。出かけて「夕方になっても戻って来ないし、警察に頼んで探してもら」うと、運搬車の下敷きになっていた夫が発見された。S.Rさんは「（夫が）いきなり亡くなって、一番ショックだった」と振り返る。しかし、悲しみはこれだけに止まらなかった。

翌年、姑が自死する。「仕事から帰ってきたら昼ごはんもそのまま（どこにも）いなかった」ため警察に捜索してもらって発見された。「親子して警察のお世話になって」。理由は不明であるが96歳であった。

かくして、S.Rさんは一人暮らしとなる。しかし、長女と次女は近くの久慈市に、四女と五女は盛岡市に住んでいるため、娘たちはたまに母の様子を見に帰って来る。千葉にいる長男は、春のゴールデン・ウィークには毎年畑こしに戻ってきている。

ほとんど出かけることのないS.Rさんは「用事があるときは民生委員に頼んで家の近くまで送り迎えしてもらおう」。ガソリン代程度の謝礼をするという。出かけた際についてに買い物もする。

S.Rさんは年金のほかにヒエやアワ、タカキビなどの雑穀を売って多少の収入を得ているが、孫とひ孫へのお祝い、地域でのお見舞いや香典などの付き合いに結構かかるという。

S.Rさんの現在の楽しみは、趣味のちぎり絵を作ることや、月に1度、地域の高齢者が地区の集会場に集まって開かれる「お話し会」に行っておしゃべりすることである。

「ここは坂道が多くて苦労する」が、水のおいしい所でわざわざ汲みに来る人もいる。ほとんど人が来ないので「気をつかわないですむ」ので気楽だという。悩みは「最近、膝、肩に痛みを感じる」ことだと、77歳になったS.Rさんは語る。

4. 樺太引揚げ、そして山を拓く－M.Sさん－

4. 1 樺太で生まれ、岩手に入植する

M.S さんは、現在 81 歳の夫とワンちゃんとともに暮らしている。ご主人とはいとこ同士である。

M.S さんは 1935（昭和 10）年 2 月、当時日本の国土であった樺太（現、サハリン）の豊原市（現、ユジノサハリンスク）で編み物店を営む両親のもとに生まれる。2 年後、5 年後と弟たちが生まれる。

M.S さんの両親の出身地は広島だったが、酪農をするために樺太へ移住したのであるという。しかし、素人だからと酪農はやらずに、洋装店をしていた叔母の勧めで編み物店を営むことにしたらしい。

「2 階でセーターとか軍手とか編んで、1 階で売っていた」。「じいちゃん（＝夫）の親と（うちの親が）仲が良くてね、一緒にやっていた」。

豊原第三国民学校に入学したのは 1942（昭和 17）年であった。

前年 12 月、日本はアメリカに宣戦布告して太平洋戦争に突入するのであるが、その辺の記憶は定かではないようである。M.S さんが 12 歳になった 1947（昭和 22）年、ソ連軍が樺太にも進攻してきた。

店に来たソ連兵が「娘を出せ」というので、叔母の夫が「いない」というと、叔父はそのままソ連兵に連れて行かれてしまった。休憩のときからくも逃げるのができて、それで M.S さんも「本当にこれはやばいな」と身の危険を感じたという。

本土へ避難することにしたのであるが、軍の将校から北海道へ行くのなら 3 日後に荷物を 3 つだけ持って来いと言われて指定された場所へ行くと、避難する人びとと荷物の数はみなばらばらだったという。しかし、親子 5 人にとってはむしろ身軽でよかった。

真岡（現、ホルムスク）へ移動し、そこから船で函館、さらに秋田まで来てそれから盛岡に移動した。その後、樺太からの人たちと夫の親たちとも一緒に今の地へ入植したのが 1948（昭和 23）年 5 月であった。46 戸でアカマツ林だった山を共同開墾した。

樺太では 5 年生の時に終戦だったので小学校は卒業していなかったが、1950（昭和 25）年に入植地の属する地区の M 中学校に入学する。しか

し、授業は「ほとんどわからなかった。英語とか数学とかね」。

M.S さんは中学を卒業した年の秋、静岡へ働きに出る。「みかんもぎの季節労働でね。要するに口減らしだね」と、当時、開拓地での生活には厳しいものがあった。「口減らし」というのは、弟は中学生で、その下の弟は小学校 5 年生であったから、M.S さんの食いつ持を弟たちに回すとともに、出稼ぎで得た賃金を仕送りするためであった。仕事は「稲刈りとか、農家の手伝いだったね」。

その年の 12 月で帰郷するつもりだったが、働き先の娘が結婚したためにその分の働き手として出稼ぎを延長する。

4.2 結婚、そして母となる

翌年、実家から帰ってくるようにと手紙が届いた。すぐ下の弟が中学を卒業し就職して家を出たため、「労働力として帰ってきてほしかったんだね」。自分としても、「ここが良かった」し、「母親の近くにいたい」気持ちもあって帰ってきたのであった。

帰郷してほどなく、M 家の跡取りだった夫に嫁ぐことになる。親同士の仲が良かったことから親が決めた結婚だったが、「この人（＝夫）に惹かれてたから」と振り返る。M.S さんは 19 歳、夫は 24 歳であった。夫の弟 2 人がまだ同居していたので、舅、姑合わせて 8 人家族という大所帯であった。

「結婚式はやったけど、新婚旅行には行かなかった」。5000 円の結納金をもらったという。当時、夫は酪農を手掛けていたので、M.S さんは「（結婚して）すぐ牛飼いになった」のである。

嫁の仕事は朝のご飯炊きから始まる。ところが、中学を卒業するとすぐ出稼ぎに出、先方では食事の支度をするともなかったため、ご飯の炊き方を知らなかった。しかも、当時は白米ではなくヒエとアワだったので、炊き方のコツもわからなかった。「3 日目くらいからね、なんとかできるようになって。最初、釜でお湯を沸かしてから（ヒエとアワを）入れて水を入れて蒸らすんだね」と、M.S さんは懐かしむ。

しかし、M.S さんが結婚した 1955（昭和 30）

年は、日本の経済も上向きとなり食糧事情もかなり良くなっていた時代であったが、「食べるのもまだ大変な時で」、姑から山菜料理を教わった。

結婚の翌々年、長男が生まれる。さらに3年後の1959（昭和34）年に長女、その2年後には次男が誕生する。

東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年、舅が64歳で亡くなる。

子どもたちは地区にあった小学校に通った。当時は60人もの児童がいて、運動会は盛り上がったという。

その後、長男は農業高校へ進学する。地区では酪農を経営する農家が多く、当時、M.Sさんの家でも牛乳を8頭ほど飼育しており、長男に酪農を継がせる目的だった。しかし、長男は金ヶ崎町にある農業大学校へ進学するも、「こんな狭いところで（酪農は）できない」と、卒業後、自衛隊に入隊する。1986（昭和61）年に結婚し、現在は滝沢市に住む。

長女は中学を卒業後、盛岡で病院に就職して働きながら定時制高校に通うが、2年で中退し、1978（昭和53）年に結婚するまで別の職場で働く。現在は盛岡市近郊に住んでいる。

次男は1976（昭和51）年に中学校を卒業した後、紡績会社に就職して夜間高校に通っていた。しかし、1981（昭和56）年に、友人のオートバイに乗せてもらって遊びに出かけ、事故で急死する。M.Sさんは「かわいそうなことをした。（自分に）甲斐性がないために働きながら学校に通わせてしまった」と子どもに苦勞をかけたことを今でも悔やむ。

M.Sさんには長男についての切ない思い出がある。

高校の先生から、「たくさんのお金はいらないから牛乳とパンを持たせてください」と言われたが、経済的に余裕がなくて持たせることができず、本家（＝生家）から千円借りてそれを持たせた。1ヶ月して「お金は大丈夫か」と聞くと、長男はポケットから丁寧に折り畳んだ千円札を出したという。「親として情けなくてね」。M.Sさんは思わず泣いてしまった。

4.3 現在の暮らし

1994（平成6）年に姑が亡くなる。82歳だった。特に悪いところがあったわけではなく、老衰だった。以後、夫との2人暮らしとなり、農業も2人でやれる規模に縮小している。自家用に米は10アールほどを作付けし、息子や娘にも多少は分けているという。畑も日々食べるくらいの野菜を作っている。他に、春は山菜、秋にはキノコを採取して、保存もしている。山のものは昔から利用してきた。

「ここは、昔は食べ物がなくて、みんなで協力しないと生きて」これなかったが、そうした助け合う気持ちがあり、現在も「調子の悪い人がいたら見に行く雰囲気がある」地域であるという。「朝、オナラをしたら夕方にはみんなが知っている」くらい、とM.Sさんは冗談を交えて地域の親密な付き合いをたとえる。

車がないので町が運行する無料バスを使って、水曜は病院へ血圧の薬もらいに、第2・4金曜日は買い物バスの日なのでそれを利用して買い物にも行く。

若い頃から歌謡曲を聴くのが好きで、今はテレビドラマを見るのが楽しみであるという。

M.Sさんは、2010（平成22）年まで地域の老人会の代表を務めていた。「生き生きサロン」と名付けて定期的に集まっておしゃべりをしたり、地区の開拓記念行事や秋祭りの際には地区の主婦たちのまとめ役となって手伝いをする、元気なお母さんである⁽⁷⁾。

5. 農村女性のリーダーとして－T.Sさん－

5.1 「私はハイカラだったかも」

インタビューで若い頃の話に及んだとき、T.Sさんがそう自分を評価した。

S.Rさん、M.Sさんの2人が結婚するのは19歳、T.Sさんは20歳である（前掲表1）。かつて、とりわけ農村地域では比較的早婚といわれてきたが、むしろT.Sさんは当時としてはやや遅めだった。

T.Sさんの生家は、嫁ぎ先であるN集落（地区）からさほど遠くない、現在は同じ花巻市に含まれる旧和賀町S地区で、地域でも比較的裕福な農家の男3人、女4人の計7人の6番目、四女

として生まれた。しかし、うち2人は幼くして亡くなっている。

終戦の年の1945（昭和20）年4月にS国民学校に入学した。戦後、1950（昭和25）年、新制S中学に上がる。

厳格な父親は「女はこうだ」という昔ながらの考え方の持ち主で、当然、門限があり出かける際には行き先も告げなければならなかったという。

姉は洋服を作るのが上手で、ワンピースをよく縫ってくれた。戦後間もない頃の田舎なので物珍しく、地域でも目だっていたという。みんなにうらやましがられ、学校のボスのな女生徒の目を気にしながら、途中で別の服に着替えたりして登校した。

中学3年の頃より、方々から嫁の話が持ち込まれるようになった。実家が「大きい」農家だったため、それ相応の家からの話が多かったという。その中でもT家の声掛けが一番強く、また、父親から「農業が一番良い」と「だまされ」て、高校を卒業した2年後の1958（昭和33）年、お見合いをして農家であるT家へ嫁入りする。夫は1935（昭和10）年生まれの子の3つ年上であった。

高校を卒業すると同時に手習い事として市内の和裁学校へ通っていたので、2年目は嫁入りの際に買ってもらった自転車で片道4キロの道のりを学校へ通ったという。洋装の若い新妻が自転車で田舎道を駆けるのであるから地域でも話題になった。冒頭のT.Sさんの言葉は、当時を振り返っての自己評価である。

5.2 子どものような嫁、そして母から主婦へ

T.Sさんは、和裁は引き続き通わせてもらうこと、農作業はしなくともよいこと、という条件で結婚したのであるという。当時、冬場の農閑期のに習い事はあったが、年間を通じて通うのはT.Sさんくらいで、そのことも地域の話題であった。

夫の姉が早くに亡くなっていたので、姑からは大事にされたという。結婚の条件を受け入れてもらえたのもそのせいであった。

新婚旅行は福島県の飯坂温泉であった。しかし、「夫の後ろをついて歩くだけ」で、食事も「夫が食べたら食べる」と、「今思うと子どもみたいだったな」とT.Sさんは懐かしむ。

嫁いだころのT家の家族構成は、義祖父、義祖母、義父、義母、夫、夫の弟、そして自分という7人の大家族であった。

当時の思い出としてT.Sさんはカレー・ライスを挙げる。日本が高度経済成長期に入った頃とはいえ、農家の食事としてはカレーはまだ珍しく、作れる主婦もまだ少なかったが、T.Sさんは実家にいた頃から作っていた。しかも、実家が9人家族であったことから、7人家族のT家の食事の世話は苦ではなかったという。T.Sさんの作るカレーはT家でとても喜ばれた。

婚家では冷蔵庫、ローラー式脱水洗濯機、耕運機を揃えていたが、それらは出始めたばかりの製品で、近所の話の種になった。

嫁いだ翌年の1959（昭和34）年、待望の長女が生まれ、T.Sさんは母となった。T家は当主が代々同じ名を継いできた旧家であることから、舅も姑も女の孫であったため落胆はしたが、次に期待を掛けてT.Sさんに辛く当たることはなかったという。しかし、それから5年後に生まれた二番目も女の子であった。周囲からは「また女か」と言われたが、実家の母親から「女だって育てようで男に勝るんだ」と言われて勇気づけられた。

1965（昭和40）年1月、祖父が数え94歳で死去する。その翌年、長女が小学校に入学したが、2年後、地区にあったN小学校がU小学校に統合され、長女はスクールバスで通学することになった。1971（昭和46）年には次女も小学校へに入学し、その後、2人ともU中学校から地元のH高校へそれぞれ1975（昭和50）年、1980（昭和55）年に進学し、卒業後、長女、二女ともに東京の大学へ進む。

次女が高校に入学した年の8月、T.Sさんは第2回岩手県女性海外研修に参加して中国の東北地方を10日間ほど訪問する。その際に「自分の視野の狭さや考えの甘さ、経験のなさ」を実感し、「自分の出来ることで社会のために貢献できる人生を送りたい」と思うようになったという。

この経験もあって、翌1981（昭和56）年には長女をフランスに短期留学させ、1984（昭和59）年には次女もアメリカへ短期留学させた。

1983（昭和58）年10月には姑が79歳で逝去する。T.Sさんは、姑から切干大根など様々な保

存食の作り方を教えてもらったことを思い出すという。姑が亡くなって8年後（1989年）の11月、舅が90歳という長寿で死去する。大学を卒業して外資系の企業で働いていた長女が結婚した1か月後であった。孫の花嫁姿を見てみかけた。次女はその2年後に結婚する。かくして、T.Sさんは夫と2人きりの生活となった。

1993（平成5）年には次女に初孫が生まれる。ところが、それから4年後の1994（平成6）年、夫が交通事故を起こし、入退院を繰り返すも翌95年6月に他界した。まだ60歳であった。

長女は結婚前の一時期、会社からニューカレドニアに派遣され、結婚後、夫と共に上海に赴任していた。現在は北海道に暮らす。

次女は結婚後、首都圏に住んでいたが、父親の急死によって母親が一人となったため、家族で戻ってきて同居することにした。現在、T.Sさんは娘夫婦と孫2人の5人暮らしである。

5.3 地域のリーダーとして

次女が結婚した1991（平成3）年、53歳になったT.Sさんは周りから推されてU農協婦人部の部長に就任する。そして、1992（平成2）年、U農協が花巻市農協と合併することになり、T.Sさんは引き続き花巻市農協の婦人部長に就任した。翌年、全国農協婦人部組織活動発表会で報告するなど、1998（平成10）年に代表を辞任するまで、女性の自立を目標に積極的に地域に係わって活動を展開する。

1997（平成9）年にはJA女性部が運営主体の産直の立ち上げにもリーダーとして関与し、現在、岩手県内でも有数の売り上げを誇る産直の基礎を固める役割を果たしてきた。また、1997（平成9）年から農業体験者を受け入れて農業への理解と啓蒙を深める活動も繰り広げてきた。女性部の代表を辞した翌年の1999（平成11）年1月には花巻市議会選挙で当選し、女性議員第1号となってさらなる地域活動を推し進めてきたのである。

夫生存中のことであるが、「（夫に）隠れて歩いた（＝活動した）」というほど、かなり積極的に花巻市全域の農村を回って女性の自立を説いたという。現在は、JA女性部のOBとして、地域の

1人暮らしの高齢者を支援する活動やイベントに様々関わっている。

夫が亡くなった年、1人で6ヘクタールもの水田を維持するのは無理なので、娘たちと相談して地域の農業法人に5ヘクタールを委託した。自身は家の「アダリホドリ（＝周辺部）」を作るだけと言うが、約1ヘクタールほどの田んぼで無農薬有機栽培の米作りをして、次女が営むレストランに提供している。

さらに、JA女性部と連携して、古代米で田んぼアートを楽しむ子ども田植えのイベントも、所有する水田を利用して主催してきた。

5.4 楽しみ、そして、現在の暮らし

「昔から外国に行きたいと思っていた」というT.Sさんは、長女の夫が香港に仕事で滞在していた1989（平成元）年、夫と一緒に「遊びに行っ」てきた。「香港は生活そのものが日本とは違」っていて、海外は「日本とは別の光景が見られて」ととても興味深かったという。

ところで、T.SさんはJA女性部の代表に就任した1991年頃、誘われてU地区公民館で開催される女性の集まり「花ふたたびの会」に入会する⁽⁸⁾。「入ったきっかけは、（代表の）Kさんから声をかけられ」て「詩を書き始めた」のである。

詩作を始めてからの変化を問うと、「（自分では）成長したかどうかはわからないが、でも、農作業中にモノを見ることは変わったかなと、自分なりに（思う）。（それまでは）花が咲いているな、というだけだったのが、花（そのもの）を見るようになった」。

T.Sさんの作品に「手造りトーフ」と題する詩がある。これは「減反で大豆を転作した（時の）、舅との思い出（の詩）」であるという⁽⁹⁾。減反（＝米の生産調整）した田んぼで栽培した大豆を原料にした味噌は現在も作っており、これはじっくり熟成させる「三年味噌」である。次女の店にも提供している。また、長女がニューカレドニアに行っていた時、一時帰国した情景を母親の眼から詠った「ハイビスカスの似合う娘」という詩もある⁽¹⁰⁾。

T.Sさんはこれまで大きな病気になったことがない。というのも、「田畑を守んなければという

気持ち（が強い）から」で、「掛かりつけの病院が無いから、（悪くなったら）どうすっぺネ」、「いつかは（病院へ）行って名前を出しておかないと」と冗談を言うほど元気である。

食品等の買い物は食事を担当する次女が買ってくるが、自分で何か欲しくなった際には T.S さん自身が車を運転して買い物に行く。

農業法人の従業員でもある T.S さんは、農繁期の 4 月から 10 月までの半年間、給料として月 50 万円ほどを得ている。これに年金が加わるので金銭的には不自由はないものの、5 ヘクタールの水田の水利費として土地改良区へ年額 31 万円を負担しなければならず、その他に肥料代、農機具の維持費などに「経費はかかるが米を作れてうれしい」と、T.S さんは農業の喜びを語る。

「（夫には）いろいろさせてもらって感謝（している）」、「十二分に歩いたし、十二分に勉強もした」と、これまでの自身の歩みを T.S さんは振り返った。

文集『花ふたたび 11』（2010）に T.S さんはエッセーを載せている。

「あなたが旅立った時、私はまだ五十代後半で、家と農地を守ることに一生懸命でした。働くことがあたりまえの時代に生きて来て、それが残された者の務めだと思っていました。・・・（略）・・・あなたの好きだった夏椿の花が、今日も二つ咲いて散りましたよ」

「千の風になって（夫の十三回忌）」と題されたこの文章は「風が少し出てきました。／千の風になって あの大きな空を／ふきわたるのですか。／今迄 みんなを 守ってくれて／ありがとう…」と結ばれている（p59-61）。

6. おわりに―農村女性はかく生きてきた―

S.R さん、M.S さん、T.S さん、3 人のお母さんはほぼ同世代であるものの、それぞれの生活経験は三様である。生きてきた時代は同じであるものの、それぞれの生活社会は驚くほど異なっていた。

中野卓（2003）は「社会によって規定されながら逆に社会を規定している存在としての個人」と

規定するが（p26-27）、3 人のお母さん方が生活展開してきた「社会」は、それぞれ個別的な「社会」である。これを「地域（社会）」と置き換えてもよい。

しかしながら、われわれは、3 人のお母さん方の生活史を通して、そこに 3 人が生きてきた日本の時代的・社会的特質の「部分」を学ぶことができよう。例えば、山中での木炭焼き家族、外地からの引き揚げ―開拓家族、平場農村の農家という 3 人の人生初期における家庭―家族とその生活環境、「学校教育」と一言で括るものの、小学校を途中でリタイアせざるを得なかった S.R さん、中学校を卒業して出稼ぎに就いた M.S さん、同時代では稀であった高校まで終えた T.S さん等々、お母さん方が経験してきたことは現代日本社会のまぎれもない事実の諸側面である。

もっとも、この考察では、中野が言うところの「生活史の重大な転機となるような状況」を「どのように受け止め、どう対処したか」、そして「自分が何であるか、何でありうるか」「どう考えたか」というところ（中野；2003、p43）まで迫りえたかどうか、はなはだ心もとない限りである。しかし、少なくとも、そうしたことの「反復が、人生においてその人ならではの人柄を創り出し」た点（同書、p43）については、3 人のお母さん方に見出し得るように思われる。

注

（1） 有末（2012）も、「生活史」は「ライフ・ヒストリー、個人史・事例史、個人的ドキュメント、ライフ・ストーリーなどの関連概念や派生概念を含む包括的な」概念で、「さまざまな概念の多層的、重層的な視覚の上に成り立つ」と規定する（p10）。

（2） 本稿は、前任校の岩手県立大学総合政策学部での授業科目「地域調査実習Ⅲ」（2011 年度・前期）の成果の一部を原資料としている。「岩手の郷土に生きる女性たちの生き方を学ぶ」というテーマで、岩手県内に住む 4 名の女性に協力を得てヒアリングを実施した。従って、分析において「現在」とするのは、筆者が 2010（H22）年 10 月～2011（H23）年 4 月にかけて単独で最初のインタビュー調査を実施した後、学生を指導して詳細なヒアリングを行った 2011（H23）年 5 月～6 月時点を指す。その後、筆者が補充のヒアリングを行った。協力いただ

いた4名の女性のうち、ここでは世代的に近接していた3名のお母さん方を対象に論述することにした。

(3) Y集落を含むこの地域全体が限界化している状況で、しかも沢筋に展開する小字地域では数軒の家の跡のみが残る所、近い将来に消滅すると思わざるを得ない所が散見される。

(4) 以下の記述において、「」は本人の言葉で、()は筆者の補足、(＝)は筆者による補注を示す。

(5) 戦前、北上山地には福島県から多くの木炭出稼ぎ者が来ており、中には定住する人々もいたという(畠山;1980、p92)。こうした木炭焼き職人は家族で山に住むが、原料の木が無くなると次の山へ家族で移住するので、一つ所に5年と留まることがなかった(畠山;2003、p188)。S.Rさんの両親も、出身こそ県内であったが、専業製炭者として山から山へと渡り歩いていたと思われる。

(6) この地域一帯では藩政期より砂鉄を産していたことから製鉄が盛んに行われるとともに、一部では金も産出していた。盛岡藩は北部北上山地でも金山開発を進め、また、八戸藩は中世末からやはり北部北上山地でたたら製鉄による産鉄に力を入れてきた(久慈市史編纂委員会;1993)。S.Rさんの下のお宅には甲冑・槍などが伝わっており、産出鉱物を監督・取締りのために藩から派遣された武士の末裔であるかもしれない。この地域に尾根伝いの道が縦横に走っていたというのはまさにこうした歴史を物語る。1970年代以降、川沿いや山の中腹に道路が開削されて交通の便が改善された。

(7) T地区は2008(平成20)年に開拓60周年を迎えた。祝賀会では、M.Sさんたちが当時のジャガイモ団子を再現して食し、開拓の頃を懐かしんだ(2008年9月8日付『岩手日報』)。

(8) これは同じ地域のK.Oさんが代表を務め、小原麗子氏に指導を仰ぐ文芸サークルで、地区の女性たちの思いや心象などを詩や散文にして持ち寄って発表し、年に1冊の作品集にまとめた。しかし、K.Oさんの体調不良や公民館の運営方針の変更のため、2011(H23)年3月で活動を停止した。なお、『花ふたたびⅧ』(2004)に執筆者の年譜が掲載されている。T.Sさんについては一部参考にさせていただいた。

(9) 「転作がもたらした大豆の利用が／手造りトーフのきっかけだ／・・・(略)・・・／そっともられたトーフを

／義父は／うん 歯ごたえがあると 一言」(小原;1992、p24-25)。

(10) 「自慢だった黒髪も／金髪もどきに変色し／やけに白い歯が目立つ娘が／雪のちらつく十一月／三百日ぶりに我家に帰ってきた／・・・(略)・・・／このままの食事を食べたいといいながらも／少しのみそと梅干を／荷の中に忍び込ませ／又／地の果てへと飛び去っていった」(小原;1992、p79-80)。

参考文献

- ・有末賢;2012、『生活史宣言－ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会
- ・畠山剛;1980、『岩手木炭』日本経済評論社
- ・畠山剛;2003、『炭焼きの二十世紀－書置きとしての歴史から未来へ』彩流社
- ・久慈市史編纂委員会;1993、『久慈市史 第二巻通史 近世』
- ・中野卓;1977、『口述の生活史－或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房
- ・中野卓;1995、同書、増補版、御茶の水書房
- ・中野卓;2003、『生活史の研究』(中野卓著作集 生活史シリーズ 1巻)東信堂
- ・小原麗子編;1992、『岩手おなご詩集』青磁社
- ・大牟羅良;1962、『北上山系に生存す－声なき地帯の声』未来社
- ・大野晃;2008、『限界集落と地域再生』信濃毎日新聞社
- ・桜井厚;2013、『『口述の生活史』はいかにして成立したか』(山田富秋・好井裕明;2013、『語りが拓く地平－ライフストーリーの新展開』せりか書房)
- ・矢内論;1992、『農村の変動と生活』南窓社

【付記】

本稿の基となった資料は注2の通りであるが、筆者の厳しい指導に耐えて調査を行ってくれた岩手県立大学総合政策学部第11期生の佐藤ゼミ4名の学生、村上(旧姓・小笠原)未来さん、佐藤希美さん、館崎祥枝さん、柳村香菜さんに感謝するとともに、ご協力いただいたお母さん方に深くお礼申しあげます。

